

# 川和の今と昔

「図説 都筑の歴史」刊行イベント 2018.4.18

ミーティング 2018.4.11



散策ルートマップ

## 瑞雲寺

川和駅の西に落ち着いた臨済宗円覚寺派の寺院。本尊は東方薬師瑞光如来、開創年は歴応元年(1338)。医王院という山号がある山門を入ると右に筆塚があります。瑞雲寺では50年ほど前から筆供養が行われており、年末に使い古した筆に感謝をこめて、お焚き上げが行われています。寺の秘宝に薬師様の腕に鷹がとまっている「鷹薬師如来」があり、12年に一度開帳されます。鷹薬師如来は、昔徳川家康が鷹狩りに出かけた際、日ごろ愛していた鷹が逃げだしてしまい、家康は大変惜しまれ、ひそかに薬師如来に祈願したところ、手元に戻った不思議な靈感を感じて、彫刻して寺院に祀ったと伝えられています。

元治元年(1864)6月、境内で勸進大相撲が行われました。当時の横綱雲龍久吉、大関小野川喜三郎以下数百人が瑞雲寺に来て、地方の興業では稀にみる規模でした。大相撲の終わった翌日、川和の若集連中と大喧嘩となり、死傷者がでるほどの大事件になったといひます。



瑞雲寺



筆供養



川和の宿の地図



## 川和の市



地下鉄グリーンラインの川和町駅の西に、川和の「宿」と呼ばれる集落があります。この宿で開かれた市は「川和の市」といわれ、近郷近在の人々の間で親しまれてきました。この宿の真ん中を八王子街道が通り、民家は広い前庭をとって立ち並んでいました。この各家の庭が、市の場所として使われました。

この道の両側の家の庭に店を開きました。

この市に行かなければ、正月の準備ができないとまでいわれ、歳暮や正月に必要なものを手に入れるため、農家では金を蓄え準備しました。宿の家々は、市の前の日の24日に、馴染みの商人を迎える準備をしました。店を構える場合は、母屋の前庭や母屋でした。岸上興一郎の「川和の市」によれば、市商人は25日の早朝に、宿に入るのが習わしとなっていました。なかには古くからの関係で、前日の24日に入り、店を構える家に世話になりながら



城所家

商品を整え、その家に泊まった商人もいたといわれています。

城所家(きどころけ)の総本山とされる屋号「オモチ」では、商人のために布団を40組も準備したと伝えられています。店は午前10時ころから真夜中まで開かれました。このように賑わった川和の市は、昭和30年代から衰退に向かい、かつて100店を超えたものが、最終の昭和42年(1967)には2~3店になりました。衰退した主な理由は、横浜線の中山が急激に発展し、市商人が徐々に中山に移り、中山で市を開いたことがあげられています。

## 八坂神社・山王様

川和宿の中央に鎮守である八坂神社・天王様があります。幕末の頃、官軍の江戸攻めによる戦



祭りの山車(だし)

乱から難を逃れるため、知人を通して大神輿を引き取り、ご神体として祀っています。境内には二十三夜塔と力比べを



山車(だし)

八坂神社・山王様

した「天王様の石」

と呼ばれる24貫(90Kg)の力石があります。真夏に行われる天王様のお祭りには、花籠を先頭に山車(だし)が出て賑やかです。

## 川和の赤ひげ先生



あかひげ先生  
暖かく人間味あふれる人

川和には、赤ひげ先生と呼ばれる神様のように慕われた前田収治という医者がありました。先生は江戸時代末頃の生まれで、都筑郡の大半を馬に乗って往診していました。金持ちの人々からはきちんと薬代をもらい、貧しい人からは「金はいらないよ、よくなってよかったなあ」と診察代をもらわなかったり、農作物で薬代にかえたり、



当時の診察室



旧前田家

でした。お酒が好きで、晩酌をすると、誤診してはいけないからと見てくれなかったそうです。

先生の家は宿にあり、5代続いた医者の家で 8,000 平方メートルくらいの広い庭には、けやきの大木が茂り、通りから玄関まで石畳が敷かれていました。

家屋敷は、いまは駐車場と個別住宅地になっています。母屋の間取りは、特別診察室、土間の玄関、玄関間、仏間、客間が並んでいました。母屋の裏側には、みそ部屋(食料品の収納部屋)、お勝手、広間、中の間、それに床の間や違い棚がある部屋がありました。

## 八幡神社

古くは河輪神社といい、川和の氏神となっています。由緒や創立年は、はっきりしませんが、貞観 17 年(875)以前の創建と想定されます。明治 26 年(1893)年に八幡神社となり、大正9年(1920)に村社に指定されています。

境内には移転前の川和富士にあった「浅間大神」の碑、川和公会堂前にあった庚申塔などがあります。昭和初期に伐採されるまでは、当時関東一といわれた杉の大木がありました。樹齢が 1,000 年以上で、高さが 28 間(約 58m)、周囲が2丈4尺(約7m)もありました。



八幡神社の鳥居



八幡神社本殿



境内の石碑

## 天宋寺

岩澤山啓運院天宋寺といい、浄土宗の寺院です。本尊は阿弥陀如来。天文 8 年(1539)小机の泉谷寺の東譽(とうよし)上人の開山、翌年の村民伊左衛門の先祖が開基となっています。岩澤家の菩提寺で、檀家は限られているといえます。境内には江戸時代初期に川和から青砥への渡し船の土手に

あった、2体の地蔵のうちの 1 体があり、京保元年(1539)、建立のものだといわれています。また、西国三十三観音の像や芭蕉 48 歳の時の句、元禄(1691)の句碑があります。

### うき我を さびしがらせよ かんこ鳥

「世を憂しと感じて自ら選んだ孤独の境遇にあるのだが、郭公よさらに寂しさを与えてくれ」という意



天宋寺



土手にあったお地蔵様

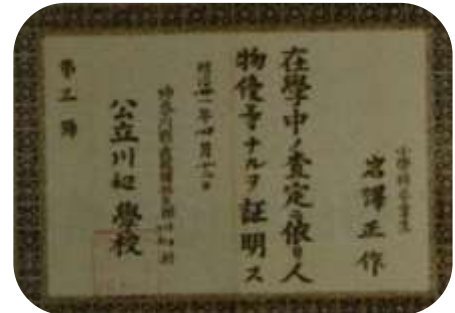
### 考古学者 岩澤正作(1876~1944)

植物学者の松野重太郎とともに川和村が排出した教育者に岩澤正作がいる。岩澤正作は、明治9



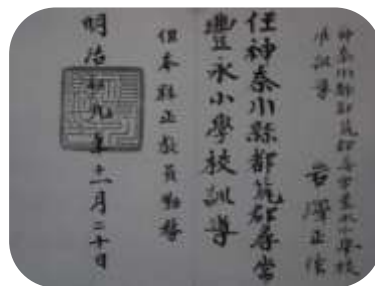
岩澤正作

年(1876)都筑郡川和村の農家の三人兄弟の二男として生まれました。明治22年(1889)4月、正作は、家の南にある川和学校(現在の川和小学校)を卒業しました。成績が優秀な子どもであったという。その後、東京に出て博物学を学びました。



川和学校の成績優秀の証書

明治 29 年(1896)に都筑郡都田村佐江戸(現・都筑区佐江戸)に設立された豊永小学校訓導として勤務しました。この時の校長がヨコハマダケを発見した松野重太郎である。また同僚に根本啓介がいて、二人で植物採集に地域を歩きまわった。その間、「地質・地層巡検隊会」や「化石・岩石同好会」に入って研鑽に励んだ。その後、明治 34 年(1901)四国へ渡り高松中学に赴任、翌 35 年 26 歳のとき群馬県高崎中学に転任した。その後、大正2年(1913)に妻の実家のある大間々の公立普通学校(現・群馬県立大間々高校)で博物、農学、漢文などを教えた。岩澤正作はこれまで学んできた博物学の学識を活用し、いままでの郷土史家に学研究を進め、群馬県におけるました。特に何層もの明瞭な火馬の遺跡に着目して、火山噴出応用した功績は、火山考古学の研究分野は、自然科学から郷



神奈川県小学校訓導の証書

ない自然科学的手法で考古初期の縄文土器研究を主導し山灰層や軽石層に覆われた群物を古墳の発掘調査と分析に先駆けとなっています。正作土史、考古学と幅が広く、全国

を明らかにするための古墳調査を行いました。昭和9年(1934)には昭和天皇の前で「群馬県の陸産貝について」と題した研究を発表しました。正作は自らの足で収集した多数の植物と鉱石の標本を、左江戸の豊栄小学校に寄贈しています。また正作が集めたものは、みどり市の大間々町博物館(コノドン館)と高崎市にある歴史博物館に納められています。



### 無患子(むくろじ)

無患子の黒色の種は、お正月の羽子板の羽子につかわれます。この無患子を世の中に紹介したのが、郷土の教育者、植物学者、俳人の松野重太郎です。

神奈川県史蹟名勝天然記念物調査員であった松野重太郎は、この無患子について樹高 16m、根周り 4.8m、地上 1.5m の周囲 4.8m、樹齢 300 年と報告しています。この他に川和八幡神社の大杉森についても報告しています。



無患子

### 川和の信田日記

川和の名主信田太郎右衛門は、天保 15 年(1844)の元旦から大晦日まで、旅行で不在の日を除いて毎日欠かさず名主の仕事、事件、農作業、交友などを日記に記しています。この日記の特徴は毎日の出来事他に、必ずその日の天候が記されていることです。

天保年間(1830~1843)は4年から6年まで、天候不順が続いたため、平年の3分から7分作で米価が騰貴し、棄子や行き倒れが多く、そこに天保7年の大飢饉に見舞われ、全国的な凶作になってしまいました。その結果、物価騰貴のおさえなどと冷害や暴風雨で三分作であって、どの村も大いに荒れたことから信田太郎右衛門は、村の天候を必ず記したのです。



信田日記

### ヨコハマダケを発見した松野重太郎

横浜市には、約 4,000 種の植物が自生していますが、数少ない「横浜」の名がついた植物の一つが「ヨコハマダケ」です。このヨコハマダケは、明治の末に都筑郡川和村の出身の松野重太郎により、横浜市西区戸部町池の坂で発見されました。松野重太郎は、この竹が川岸や橋梁などに自生するメダケと違うことを発見し、当時の東京帝国大学(現東京大学)の牧野富太郎にみてもらい、新しい植物であることが分かりました。ヨコハマダケは、川和町駅近くの新しい住宅になっている旧松野家の庭に移植され、かたわらに横浜植物界が建てたヨコハマダケの英語と日本語の学名を刻んだ記念碑があります。松野重太郎は「神奈川県植物目録」を出版するなど、植物界に多くの業績を残しました。



松野重太郎



ヨコハマダケの碑



前列の真ん中が松野、左隣が牧野富太郎

## 妙蓮寺

城根山妙蓮寺は、都筑区唯一の日蓮宗の寺院です。境内には横浜市指定の名木のケヤキやイチヨウの木があります。大晦日には 30 数年前から毎年恒例となっている、住職と弟子による「水行」が行われ、多くの人々が見学と除夜の鐘をつきに集まります。現在の川和団地のあたりには、以前に七面山という山があり、そこで国家安泰のご利益があるという、七面大明神をまつっていました。いまは山は取り壊されてしまい、平成 10 年に妙蓮寺の境内に「七面堂」が建てられています。



妙蓮寺

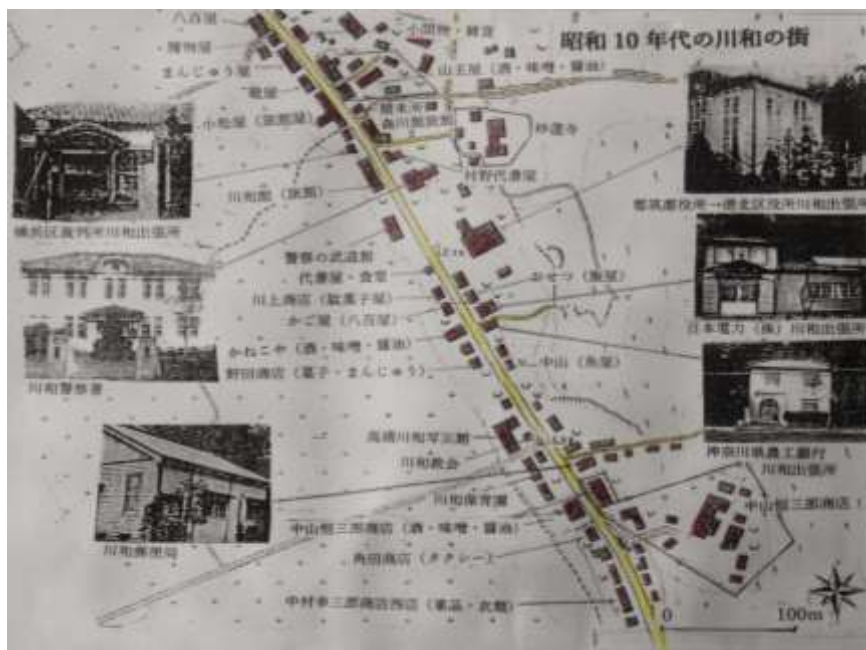


水行

## 川和について

川和町の「川和」は、河輪とか河曲のことで、水の流れが屈曲している意味といえます。明治 12 年に行政区画としての都筑郡が発足して、都筑郡役所が下川井村(現在の旭区)から川和村に移転してから、川和郵便局、川和警察署分署(当時は都田警察署)、川和登記所などの行政関係の建物、商店や旅館などが軒を連ねて、都筑郡の中心地として栄えました。

しかし、明治 41 年の横浜線が川和町を通らずに中山町を通るようになり、行政の施設もそちらへ移っていき川和町は寂れてきました。川和町に鉄道を通すためには、鶴見川と恩田川に二つの鉄橋を架ける必要があり、それを避けたためともいわれています。



川和町の地図

## 川和の菊と中山恒三郎

今日菊花展に出品されるものの多くは、大菊ですが、江戸時代後期から明治期は小ぶりの「中菊」が親しまれました。中菊は花が咲くと時間がたつにつれ花びらがねじれ、折れ曲がります。これを花弁の「くるい」と称し、様々な代わり咲きが親しまれ鑑賞されました。菊は朝顔と同じように江戸園芸文化の象徴でした。

都筑郡役所、警察署、郵便局など郡政の中心であった川和には、二カ所に菊圃がありました。豪商中山恒三郎が経営する松林圃と県会議員を歴任したに中山良材家の虎溪圃です。中山恒三郎は全国でも名高い菊の改良家でした。江戸時代の文政10年(1827)、幕臣松浦氏から菊花を譲り受け、新種育成に努力し、嘉永期には300種まで品種を増やしたといわれています。

中山恒三郎家は、明治14年(1881)に宮内庁に改良した菊苗12を献上したのが始まりで、昭和初期までに83種を献上しました。その中に昭和天皇が愛された名花「男山」がありました。菊を觀賞するために松木林園を有栖川宮をはじめ各皇族方、評論家、横浜の居留外国人など多彩な人が菊圃に来訪されました。川和近在の小学生の児童たちも遠足で見学に訪れています。また、川和小と川和中の校章はこの菊にちなんでいます。川和の豪商と言われた中山家は川和保育園になりましたが、書院や蔵などが当時の面影を残しています。



名花「男山」



蔵



女工の出勤簿

## 旧太陽合資会社

中山恒三郎商店は1985年まで続き、現在は6代目にあたる中山健さんが資産管理にあっています。2年前に松林圃のあった敷地の一部を老朽化した川和保育園の移転用地として課すことになり、横浜ふるさと財団が調査に入りました。地には8棟の建物がありましたが、明治期建設の書院と蔵を残し解体されました。沢山の資料は横浜開港資料館に運びこまれ整理されています。そのなかに旧太陽合資会社に関する資料があります。製糸工場を経営する太陽合資会社の女工さんたちの、住所や年齢を記録した冊子や出勤簿など貴重なものがあります。

## 川和遊水地と地下鉄車両基地

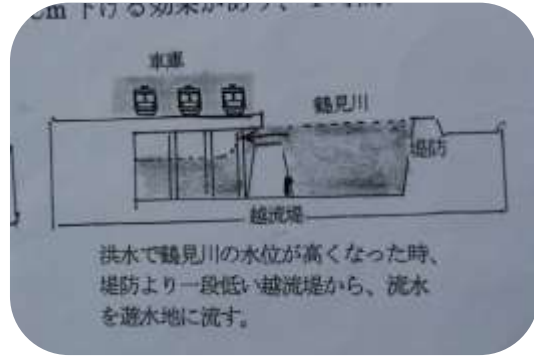
鶴見川は、しばしば洪水や氾濫を繰り返し、「暴れ川」として恐れられていました。また、昭和30年代中頃から市街化が進展し、降った雨が地中にしみこまずに川や水路に流れ込むようになり、浸水被害の危険性が増大しました。

このため昭和54年から河川改修や遊水地の整備などの治水対策に取り組みました。川和遊水地は、平成20年より使用され、増水時には12万トン(プール320杯分)の水を貯水出来、時間あたり雨量60mmに対応できるといいます。遊水地の地上部分は、地下鉄の川和車両基地となっています。平成20年のグリーンライン開業に合わせて完成し、定期検査や臨時の検査、また電車の洗浄、清掃作業を行っています。





湧水池、取り入れ口



遊水地の模式図

#### 参考文献

- 緑区史 通史編      緑区史編集委員会  
川和の歴史      川和中学校  
川和小学校創立 50 周年誌  
御大典記念      都田村誌  
都筑の民俗      港北ニュータウン郷土史編纂委員会